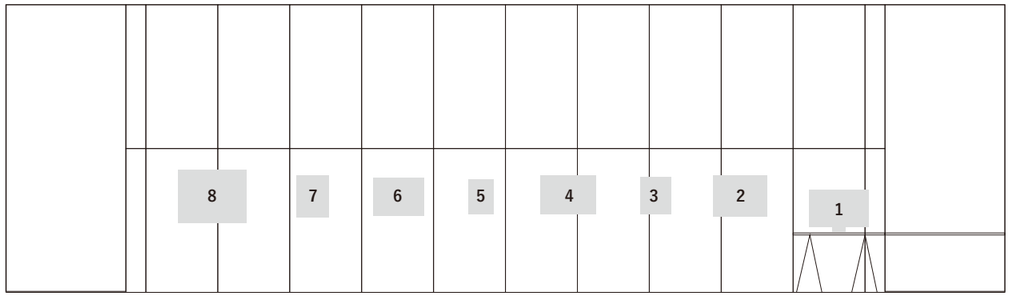
第 3 会場 ｜福知山市立図書館（市民交流プラザふくちやま 2 階｜通路）

時間：平日｜10:00-20:00（土・日 ｜10:00-18:00）
協力：福知山市立図書館



1　**2022 年度 共生の芸術祭「わたしはメモリー」記録映像**（京都市美術館別館会場）

2　**秦野良夫 / HATANO Yoshio 《 タイトル不明 》** 2002｜色鉛筆、紙
3　**似里力 / NISATO Chikara 《 無題（資料写真）》**（データ提供：るんびにい美術館）
4　**小原美鶴 / OHARA Mitsuru 《 タイトル不明 》** 2019｜糸、布
5　**西澤彰 / NISHIZAWA Akira 《 セスナ 175 型スカイホーク JA3333 》** 1985｜水彩、オイルパステル、厚紙
6　**森川大輔 / MORIKAWA Daisuke 《 橋（部分）》** 2010 年頃 -（2022 年 8 月 26 日、みずのきにて｜撮影：art space co-jin）
7　**三原巌 / MIHARA Iwao 《 タイトル不明 》** 制作年不明｜色鉛筆、鉛筆、フェルトペン、ボールペン、紙
8　**小幡正雄 / OBATA Masao 《 結婚式 》** 制作年不明｜色鉛筆、段ボール

出展者

小幡正雄 / OBATA Masao
小原美鶴 / OHARA Mitsuru
似里力 / NISATO Chikara
西澤彰 / NISHIZAWA Akira
秦野良夫 / HATANO Yoshio
三原巌 / MIHARA Iwao
森川大輔 / MORIKAWA Daisuke

本展
会場：京都市美術館別館 1 階 第 1 展示室
住所：〒606-8342 京都府京都市左京区岡崎最勝寺町 13
会期：2022 年 12 月 15 日（木）～2022 年 12 月 25 日（日）※月曜休館
時間：10:00-18:00（※最終日は 16:00 まで）
料金：無料

巡回展
会場：市民交流プラザふくちやま 3 階 市民交流スペース＋ギャラリースペース
住所：〒620-0045 京都府福知山市駅前町 400
会期：2023 年 3 月 1 日（水）-3 月 5 日（日）
時間：10:00-18:00（3 月 1 日（水）は 13:00 から、3 月 5 日（日）は 17:00 まで）
料金：無料

主催
きょうと障害者文化芸術推進機構（事務局：京都府健康福祉部障害者支援課）
協力
協力：社会福祉法人くすのき会、社会福祉法人みずなぎ学園、社会福祉法人光林会、社会福祉法人館邑会、もうひとつの美術館、社会福祉法人かんな会、三原巌原画を観る会実行委員会、社会福祉法人松花苑（順不同）

展覧会企画：art space co-jin
キュレーション：寺岡海（art space co-jin）
会場構成：dot architects、tamari architects
広報デザイン：タナカタツヤ

お問合せ

art space co-jin

art space co-jin（きょうと障害者文化芸術推進機構 事務局）
〒602-0853 京都市上京区河原町通荒神口上ル宮垣町 83 レ・フレール 1 階
Tel & Fax: 050-1110-7655
Mail: info@co-jin.jp｜WEB: https://co-jin.jp/

[f1]

2022 The Symbiosis Art Festival

2022年度 共生の芸術祭

わたしはメモリー

I am
a Memory

ごあいさつ

記憶はいつか消えてなくなるのでしょうか。私たちの中にある記憶は他者から見ることはできませんが、表現によって何らかの形が与えられる時、それは他者にも共有することが可能になります。そのように個別の経験が、ある技術や意志によって外部化され、鑑賞体験を通じて他者の記憶の一部となることで、記憶は多くの人に伝播していきます。それはまるで記憶自体が意志を持ち、私たちを媒体としながら生き続けていくことを望んでいるかのようにも思えます。

本展覧会では、「わたしはメモリー」と題し、京都府内外の 7 名の障害のある方々の表現とその背景にある体験や周囲の環境にも着目し、作品が持つ記憶とその保存について迫ります。記憶の中に飛ぶ飛行機を描き続ける西澤彰、糸を切っては結ぶ行為を延々と続ける似里力、自身の好きなモチーフをひと針ひと針縫う小原美鶴、絵を描く際に余った絵の具を施設内に架かる橋の欄干に塗る森川大輔、赤鉛筆を用いて段ボールに絵を描き続けた小幡正雄、幼少期から戦時中の記憶までも鮮やかに描き出す三原巌、幼い頃に住んでいた家をさまざまな角度から描き続けた秦野良夫。彼ら、彼女たちの表現の背景には、個人の中にある幼い頃からの記憶や、日々繰り返される行為、ささやかな歓びから、戦争の記憶まで多岐に渡ります。そのどれもが表現を通じて、言葉では表すことのできない、1 人の人間の見た景色や感覚をありありと私たちに感じさせてくれることでしょう。それは他者の生きる時間が自らのリアリティとともに新しい時間を歩んでいくことであり、時間や場所を越えて、私たちが他者と共に生きる方法でもあるのではないでしょうか。

最後になりましたが、本展覧会にご協力いただきました各作家の皆様、並びにご親族、各施設、関係者の皆様に謹んでお礼申し上げます。

本展企画者

第 2 会場

MI-1　すべて《 **タイトル不明** 》

色鉛筆、鉛筆、フェルトペン、ボールペン、紙

MI-2　**三原巌 展示資料**

新聞切り抜き

三原は戦争に関する新聞記事を集め、講演の際に使用していた

MI-3　**三原巌 展示資料**

8mm フィルム

MI-4　**三原巌 展示資料**

23 分 32 秒

三原巌の撮影した 8mm フィルムを

デジタルデータ化

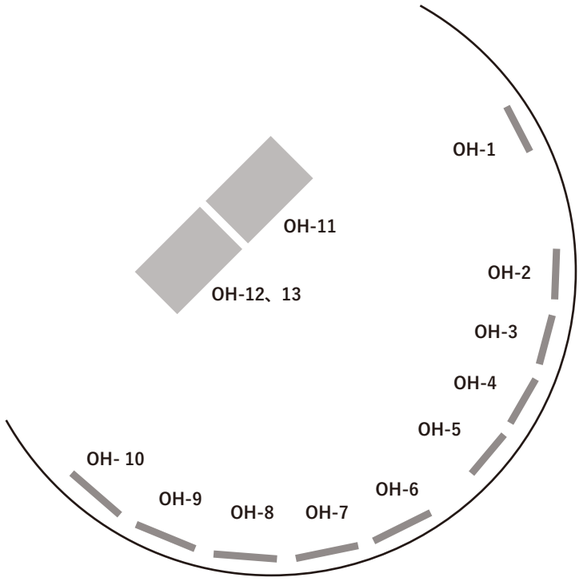
三原巌

MIHARA Iwao

1932 年生まれ、2021 年没。京都府。

1932 年に生まれた三原巌は、聴覚障害があったために目で見たものを記憶することが得意だったという。大阪にて育ち、そこでの空襲の体験は三原の心に強く残ったようだ。成人後は製本の仕事に従事し、ろう者のための社会運動にも精を出した。若い頃から絵に親しみ、ろうあ協会の会報誌に絵と詩を掲載していたという。2001 年前後、会社を退職後に自身の記憶をもとにした絵の制作を始めた。色鉛筆にて細部まで細かく描き込まれた絵に手書きの説明文が書かれた紙が添えられている。第二次世界大戦中の描写が多くあり、まだ平和だった開戦初期の日常生活を描いたものもあれば、大阪大空襲の実体験を生々しく伝えるものもある。描くだけではなくこれらの絵を持って様々な場所に赴き、体験を語り継ぐ活動を行なっていた。講演に呼ばれた際はテーマがそうであったためか、話すのはほとんどが戦争にまつわる話だったようだが、残されている絵は戦後の人生を描いたものも多い。仕事のこと、住まいのこと、趣味や旅行などについて生き生きと描いている。趣味としてカメラ、特に SL の撮影には凝っていたようで、しばしば得意げにカメラを構える自分自身の姿を描いている。2 歳頃の天井に吊り下げられていた飾りの記憶から始まり、平成に入ってからの自身の暮らすニュータウンの風景で終わっている三原の一連の作品は、戦時中の実体験の貴重な記録としてだけではなく、昭和初期に生まれ、時代を生きた一人のろう者のライフヒストリーとしても興味深い。

第２会場



OH-1 《 **タイトル不明** 》 2020｜糸、布

OH-2 《 **タイトル不明** 》 2022｜糸、布

OH-3 《 **タイトル不明** 》 2022｜糸、布

OH-4 《 **タイトル不明** 》 2021｜糸、布

OH-5 《 **タイトル不明** 》 2017｜糸、布

OH-6 《 **タイトル不明** 》 2020｜糸、布

OH-7 《 **タイトル不明** 》 2021｜糸、布

OH-8 《 **タイトル不明** 》 2020｜糸、布

OH-9 《 **タイトル不明** 》 2019｜糸、布

OH-10 《 **タイトル不明** 》 2021｜糸、布

OH-11 《 **タイトル不明** 》 2022｜糸、布

OH-12 《 **みずなぎ鹿原学園 授産製品（カバン）** 》 2022｜糸、布

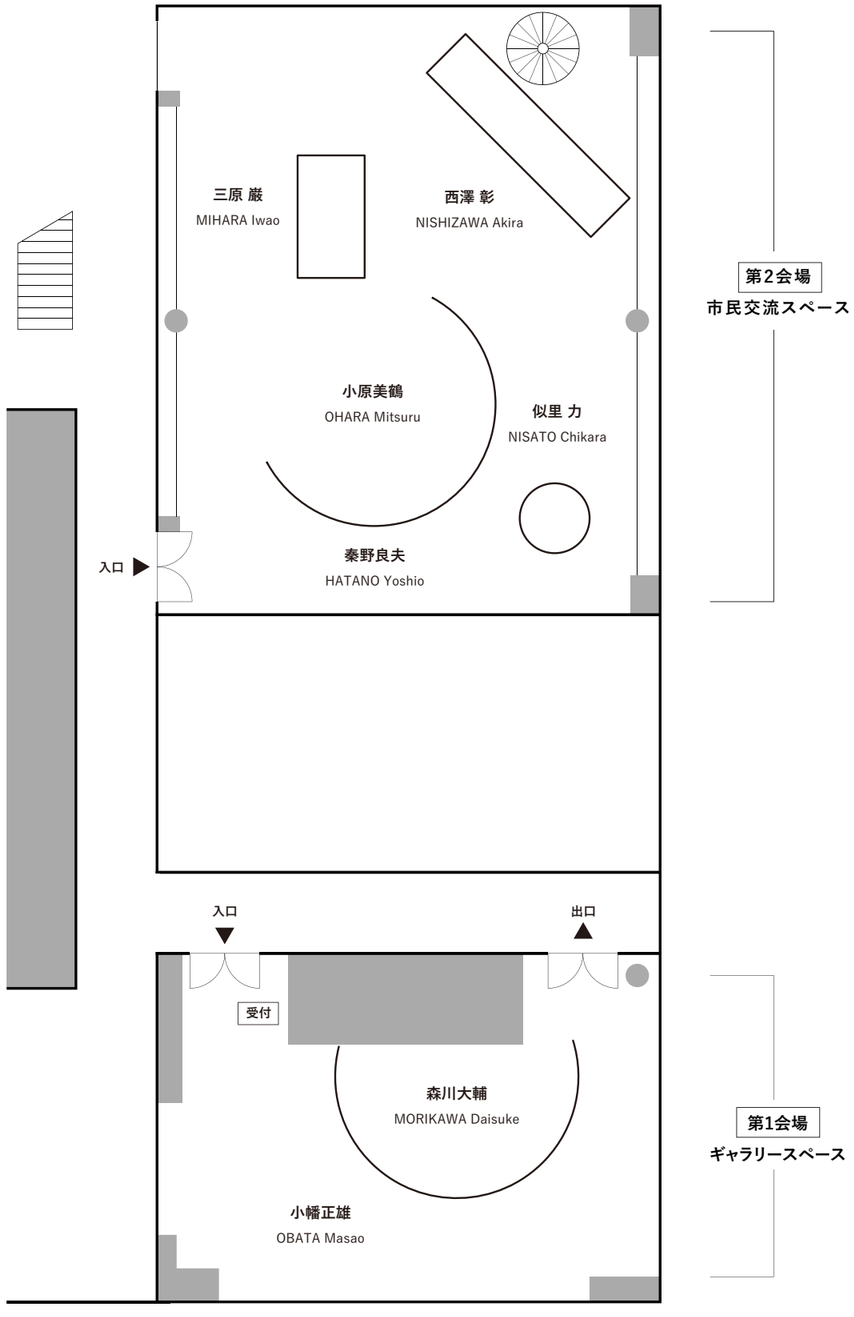
OH-13 《 **みずなぎ鹿原学園 授産製品（ブローチ）** 》 制作年不明｜糸、布

小原美鶴

OHARA Mitsuru

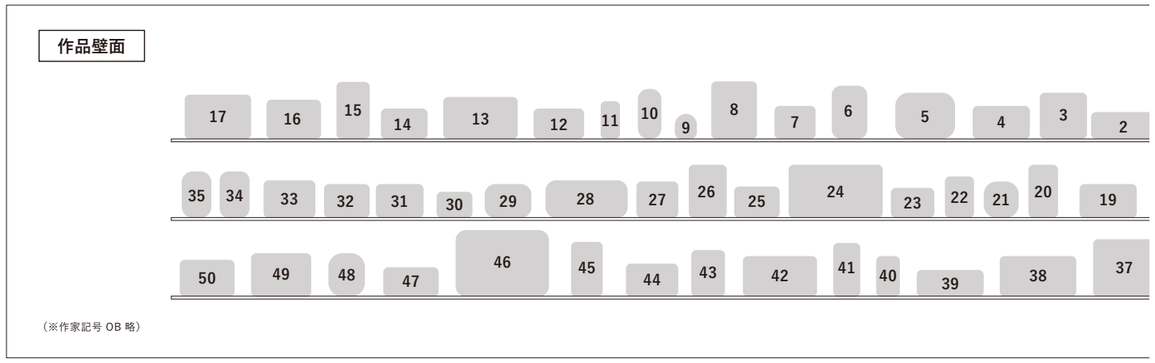
1949 年生まれ。京都府在住。
所属：社会福祉法人みずなぎ学園みずなぎ鹿原学園

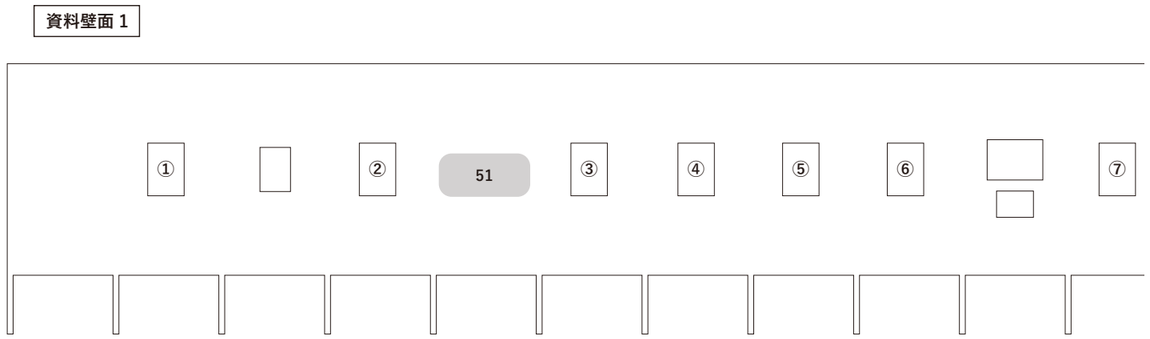
短くなった糸も大切に使い、ひと針、またひと針と丁寧に完成へと向かう。小原美鶴の刺繍作品は、完成ののちにみずなぎ鹿原学園の授産品を取り扱うブランド “nu-tan” の製品としてブローチやバックなどとして姿を変える。
幼少期から針仕事が好きだったと話す彼女は、50 代半ばからみずなぎ鹿原学園に通いはじめ、以後 17 年間、朝から夕方まで、学園で過ごすほとんどの時間を刺繍の制作に充ててきた。それほどまでに夢中になれる刺繍制作の魅力について尋ねると、彼女は照れながら「針が布をスーッと通ると嬉しくなる」と身振りを交えて答えた。
彼女の制作は、自ら糸を購入するところから始まり、その時々の好きな色を選ぶ。仲の良い友達と糸の交換をすることもあるそうだ。作品の中に散りばめられているのは、可愛らしい動物たち、ハートやお花など、彼女の好きなものばかりだ。制作を進めていくうえで、なにを登場させようか、どんな作品にしようかと悩むことはなく、ただ好きなものを順番に、朗らかに形にしていく。その間に、針は幾度となく布を行き来し、度々に生まれ続ける喜びを、彼女は存分に受け止め、歌といっしょにコミカルなダンスを踊り、周りにいる人たちを笑わせている。
そうして、小さなもので 1 ヶ月弱、大きなもので 3 ヶ月もの時間が費やされ、刺繍作品は完成する。完成した作品は、「おもろいのができた」と喜ぶ彼女の手元から巣立ち、姿を変えて製品となり、店頭に並び、誰かの目にとまり、誰かのもとへとたどり着き、その誰かの日常を明るく彩ることとなる。その旅立ちが一番嬉しいと、彼女はにこやかに話した。



第3会場（サテライト会場）
福知山市立図書館（ふくちやま市民交流プラザ2階）
※詳細は裏表紙に記載

2022年度 共生の芸術祭
「わたしはメモリー」会場配置図



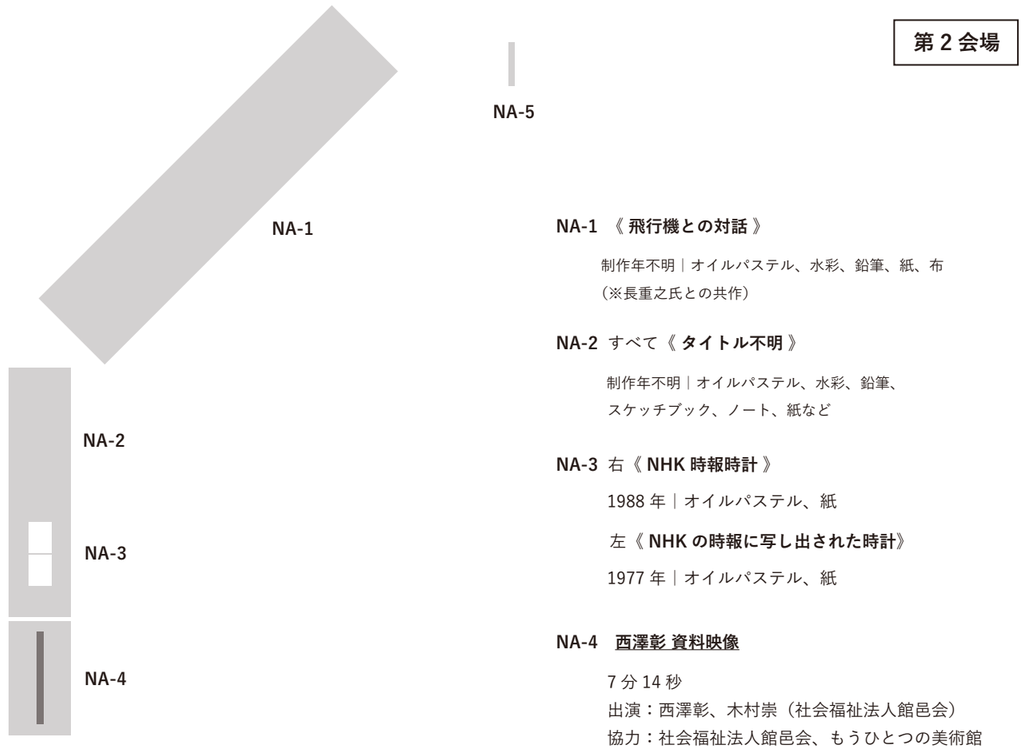


小幡正雄

OBATA Masao

1943 年生まれ、2010 年没。兵庫県。

1943 年 11 月 11 日に生まれた小幡正雄は、66 歳でこの世を去った。
中学 1 年生の時、両親の離婚を期に母と共に瀬戸内海の小さな島へ移り住み、物静かで消極的だった転校生は、のちに赤い服を全身に纏い、赤鉛筆で赤い絵を描く日々をおくった。そして、それらの絵は国内外の展覧会で注目を浴びることになった。抗えない苦労を重ねたであろう彼の人生は、40 代半ばにひふみ園へ入所したところから風向きが変わっていった。厨房から野菜のシミがついた生臭いダンボールを拾ってきては自室に溜め込み、そのダンボールに絵を描き始めたのだ。描き始めたであろう頃から 3 年がたった時、美術家・東山嘉事氏に絵を見初められ、それまで焼却処分されていた絵は作品として保管されるようになった。その 3 年後には、当時兵庫県立近代美術館学芸員だった服部正氏に取り上げられ「アート・ナウ 98：ほとばしる表現力－アウトサイダー・アートの一断面」にて作品が紹介された。そしてその後、瞬く間に日本を代表するアウトサイダー / アール・ブリュットの作家として国内外の展覧会で作品が紹介されることとなった。
2010 年 66 歳の没後、彼の物語はそこで終わらなかった。1000 点以上もの遺作が行き場をなくし残され、それらを調査、整理し所有者を確定させるプロジェクトが始まったからである。身寄りのない彼の作品の身寄りを探すそのプロジェクトの調査記録は服部正氏により「小幡正雄の遺作について」（『国立新美術館研究紀要』第 5 号、2018 年）と題しまとめられた。



NA-1 《 飛行機との対話 》

制作年不明｜オイルパステル、水彩、鉛筆、紙、布
（※長重之氏との共作）

NA-2 すべて **《 タイトル不明 》**

制作年不明｜オイルパステル、水彩、鉛筆、
スケッチブック、ノート、紙など

NA-3 右 **《 NHK 時報時計 》**

1988 年｜オイルパステル、紙

左 **《 NHK の時報に写し出された時計》**

1977 年｜オイルパステル、紙

NA-4 西澤彰 資料映像

7 分 14 秒
出演：西澤彰、木村崇（社会福祉法人館邑会）
協力：社会福祉法人館邑会、もうひとつの美術館
編集：寺岡海（art space cojin）
制作：きょうと障害者文化芸術推進機構

NA-5 《 タイトル不明 》

制作年不明｜オイルパステル、鉛筆、紙

西澤彰

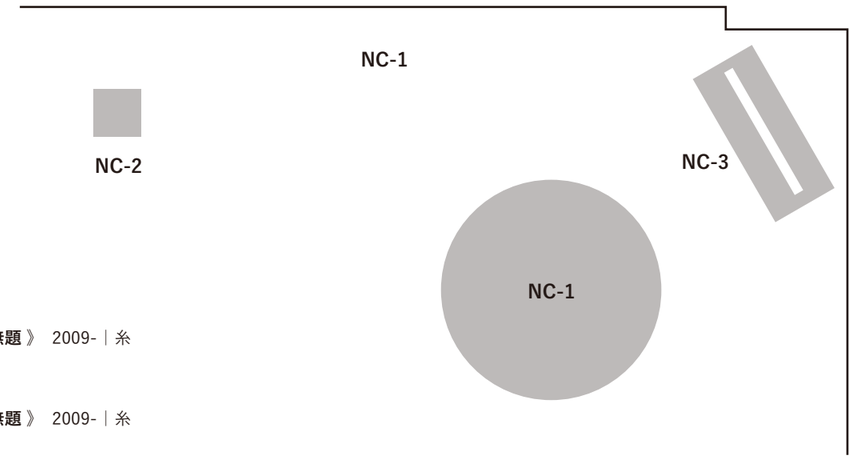
NISHIZAWA Akira

1969 年生まれ。群馬県在住。
所属：社会福祉法人館邑会 陽光園

群馬県館林市にあった今はなき飛行場（※1）の側で生まれた西澤彰は、幼い頃から飛行機が飛び立つ様子を眺めながら育ち、次第に記憶の中にある飛行機の風景を描き始めるようになった。
絵には、飛行機の胴体に描かれたロゴや、その時々の飛行機の影までも克明に描かれており、西澤の記憶力の高さが窺える。また、大きく余白を残した構図は、彼が飛行機を見上げたその時の臨場感を感じさせてくれることだろう。
モチーフとして飛行機が描かれることが多いが、その他にも電車や車、電柱なども描くこともあり、中にはテレビに映る NHK の時報を描いたものもある。本展出品作の「NHK に写し出された時計 (1977)」と「NHK 時報時計 (1988)」の 2 点は、制作年こそ 11 年の間があるが、どちらも 19 時の 5 秒前を指しており、飛行機の作品と同様に流れる時間の一瞬を正確に捉えていたことが推測される。また、幼いころから美術家である長重之（ちょうしげゆき）氏（1935-2019）と交流があり、長氏の作品の素材として扱われることの多かった帆布に、西澤の作品 195 点を貼り付けた「飛行機との対話」と題された作品も本展覧会では展示している。展示作品の中には、幼少期の西澤の作品を見て長氏が綴った言葉が書き込まれたものもあり、2 人の出会いに思いを馳せていただければ幸いである。
西澤の作品は、現在膨大な数になっている。今では彼の暮らす施設からは間近に飛行機を見ることはできなくなったが、彼は今も変わらずに記憶の中を行き交う飛行機を眺めているのだろう。

※1）大西飛行場
日本陸軍の飛行場として使用されていた館林陸軍飛行場を終戦後、1964 年に飛行機愛好家である大西勇一氏が個人飛行場として開設し、個人飛行場として運用していた日本の中でも珍しい飛行場。2004 年に閉鎖。現在はその姿は残っていない。

第２会場



NC-1 《 無題 》 2009-｜糸

NC-2 《 無題 》 2009-｜糸

NC-3　似里力 資料映像

12 分 00 秒

出演：似里力、板垣崇志

協力：社会福祉法人光林会 るんびにい美術館

撮影・編集：寺岡海（art space cojin）

似里力

NISATO Chikara

1968 年生まれ。岩手県在住。
所属：社会福祉法人光林会 るんびにい美術館

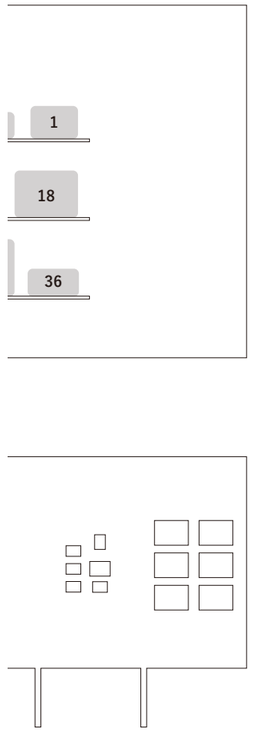
岩手県で生まれ育った似里力は、花巻市にある、るんびにい美術館内の「アトリエまゆ～ら」に通っている。当初、似里は施設内で草木染めの製品を製造する仕事のうち糸を巻き取る作業を担当しており、糸が絡まった際はやむを得ず糸を切って結び、作業を進めていた。しかし、いつしか支援員の目を盗んで自ら糸を切って結ぶようになり、いくら注意してもその行為をやめることがなかったため、施設の了承の下、2009 年ごろから糸を結び連ねてゆく糸玉の制作に没頭するようになった。

似里が「いとっこ（※１）」と呼ぶこの行為は、5mm ほどの間隔で結ばれた糸を日々生み出していく。弱視である彼は、目から数センチのところまで糸を近づけて切って結ぶ。（黒いテーブルは糸を識別しやすいようにと自身が選んで購入したものでもある。）、そうしてある時、その行為は終わりを迎え、糸玉は完成する。当初は１年ほどの期間を費やしていたが、近年は制作工程を工夫することで約 3 ヶ月に一つのペースで生み出され、現在では 30 数個ほどの糸玉が存在している。作り終えた糸玉にはさほど関心はもたず、あくまで「糸を切って結ぶ」というその行為に歓びを見出しているようであり、時には制作した糸玉をプレゼントすることもあるという。

似里の行為に終わりはない。日々、糸を切って、結ぶ。糸玉が出来上がれば、また次の糸を結んでいく。繰り返される日常の中で彼の歓びと共に結ばれた糸玉は、まるで似里の生きる時間そのもののようでもある。

※1）東北地方の方言で、名詞の後ろに「～っこ」を接続することで愛着を持った表現となる

第１会場



資料壁面２

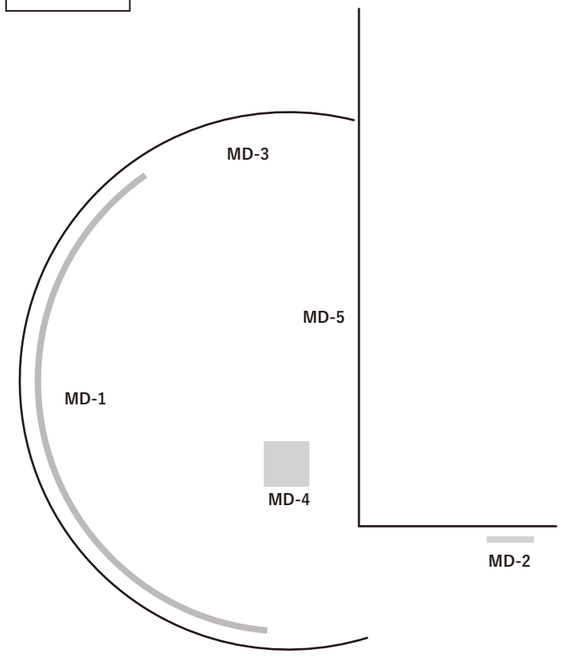
作品壁面

OB-01 《 無題（魚類）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-02 《 無題（四角ふたつ）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-03 《 無題（女）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-04 《 無題（バーベル？）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-05 《 無題（建物）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-06 《 無題（男）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-07 《 無題（家族）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-08 《 無題（男）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-09 《 無題（顔）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-10 《 無題（だるま）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-11 《 無題（男）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-12 《 無題（海の生き物）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-13 《 無題（軍艦）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-14 《 無題（植物）》制作年不明｜鉛筆、段ボール
OB-15 《 無題（男）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-16 《 結婚式 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-17 《 無題（家族）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-18 《 結婚式 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-19 《 無題（動物の親子）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-20 《 男 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-21 《 無題（男）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-22 《 結婚式 》制作年不明｜鉛筆、段ボール
OB-23 《 結婚 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-24 《 無題（ピアノのある家）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-25 《 茶わん 角ざら 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-26 《 無題（男）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-27 《 結婚式 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-28 《 家族 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-29 《 結婚式 》制作年不明｜鉛筆、段ボール
OB-30 《 時計 》制作年不明｜鉛筆、段ボール
OB-31 《 結婚式 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-32 《 無題（魚）》裏面｜制作年不明｜色鉛筆、ボール紙
OB-33 《 無題（植物）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-34 《 無題（女）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-35 《 無題（男）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-36 《 結婚式 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-37 《 無題（男女）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-38 《 ミサイル 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-39 《 ラケット 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-40 《 無題（女）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-41 《 無題（男）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-42 《 無題（船）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-43 《 無題（女）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-44 《 結婚式 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-45 《 無題（男）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-46 《 東京タワー 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-47 《 無題（魚とライフル銃）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-48 《 無題（男）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-49 《 無題（男女）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-50 《 無題（男女）》制作年不明｜色鉛筆、段ボール

資料壁面

OB-51 《 浜口ツヤ子のお墓 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール

第２会場



MD-1　壁面向かって左から

《 **タイトル不明** 》 2019
《 **タイトル不明** 》 2019
《 **タイトル不明** 》 2019
《 **ラピュタ** 》 2022
《 **タイトル不明** 》 2019
《 **タイトル不明** 》 2019（額装内上）
《 **タイトル不明** 》 2022（額装内下）
《 **タイトル不明** 》 2022
《 **タイトル不明** 》 2022
《 **タイトル不明** 》 2020
《 **タイトル不明** 》 2019（額装内上）
《 **タイトル不明** 》 2019（額装内下）
《 **タイトル不明** 》 2022
《 **タイトル不明** 》 2019
《 **タイトル不明** 》 2022
《 **タイトル不明** 》 2022
《 **タイトル不明** 》 2020

素材：オイルパステル、アクリル絵具、色鉛筆、紙

MD-2　森川大輔 資料写真

2022 年 8 月 26 日、みずのきにて
撮影：art space co-jin

MD-3　森川大輔 資料映像

6 分 40 秒
出演：森川大輔、森太三（美術作家）
取材日時：2022 年 8 月 26 日、10 月 21 日
協力：社会福祉法人松花苑 みずのき
撮影・編集：art space co-jin
協力：社会福祉法人松花苑

MD-4　森川大輔 作品資料
MD-5　木片

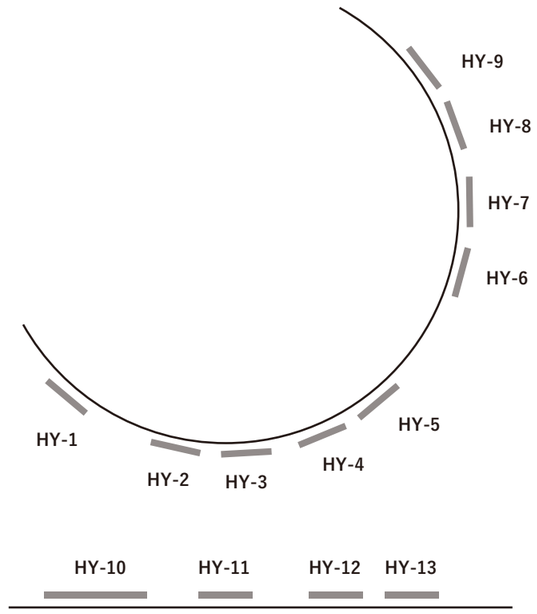
森川大輔

MORIKAWA Daisuke

1987 年生まれ。京都府在住。
所属：社会福祉法人松花苑 みずのき

森川大輔は１０年以上、毎週一度のアトリエ活動に通っている。
そこで画用紙やスケッチブックにオイルパステルや水彩、アクリル絵具などを使用し平面作品を制作している。モチーフはアトリエに置いてある図鑑や「モノタロウ」のような業務用品のカタログ、旅行パンフレット、また自身が撮影した写真などから選ぶ。虫や生き物、長靴、農業用のシート、海岸や虹の風景などを描いた作品が 1 回の活動（約８０分）で３～４枚ほど仕上がる。
作画の他に、パレットに残った絵の具でアトリエ内にある棚や備品にも着彩することがあり、施設敷地内にある石垣や職員の車のマフラーにまで施すこともあったが、さすがにそれらは望ましい行為ではないので控えてもらうことになる。その代わりに許容されたのが、木片や欄干への着彩であった。
木片は美術作家でもあるアトリエ講師の森太三氏が持ち込んだ不要になった角材などの切れ端である。本来であれば廃棄されてしまうだけの木片に、ここで新たな役割が与えられることになる。
欄干は敷地内に昔からある橋で、広場と棟の間の水無川の上に 10m ほどの長さで架かっている。森川はそこに残った絵の具でサビ止めを施すようにペイントする。めくれた塗膜を手で払い落としたり、絡みついた雑草を取り除いたりして欄干の維持保全をするその姿からは、愛着と責任感さえ感じられる。
机上での描画から身近なものへの着彩までの一連の行為がルーティンとなっており、日常の景色へ溶け込んでいく。欄干は長年の塗料の集積により新しい層に覆われていく一方で、風化して剥がれてもいく。色彩の浸透と劣化、さらに周囲の人の許容による均衡がもたらす眺望がここにある。

第２会場



HY-1 《 **タイトル不明** 》 2003｜鉛筆、色鉛筆、紙
HY-2 《 **タイトル不明** 》 制作年不明｜色鉛筆、鉛筆、紙
HY-3 《 **タイトル不明** 》 2005｜色鉛筆、紙
HY-4 《 **タイトル不明** 》 2002｜色鉛筆、紙
HY-5 《 **タイトル不明** 》 2001｜色鉛筆、紙
HY-6 《 **タイトル不明** 》 制作年不明｜色鉛筆、鉛筆、紙
HY-7 《 **タイトル不明** 》 2002｜色鉛筆、紙
HY-8 《 **タイトル不明** 》 2002｜色鉛筆、紙
HY-9 《 **タイトル不明** 》 制作年不明｜色鉛筆、紙
HY-10 《 **タイトル不明** 》 制作年不明｜水彩、鉛筆、紙
HY-11 《 **見えない記憶** 》 制作年不明｜鉛筆、紙
HY-12 《 **タイトル不明** 》 制作年不明｜色鉛筆、紙
HY-13 《 **タイトル不明** 》 制作年不明｜色鉛筆、鉛筆、紙

泰野良夫

HATANO Yoshio

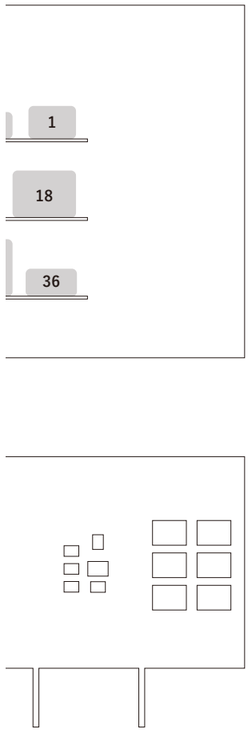
1935 年生まれ、2007 年没。群馬県。

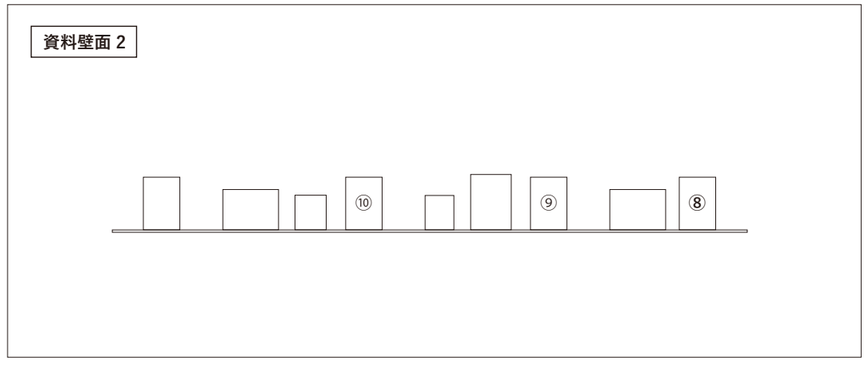
一見すると平凡な室内や屋外の景色だが、よく見ると壺や家具、電柱の傍らに、どこかで見たことがあるような、しかし使い道がわからない道具がある。また画面の中には見上げる視点と見下ろす視点という風に、複数の視点が混在している。
この不思議な絵の作者である秦野良夫は、1999 年、65 歳の時にかんなの里へ移ってきた。以前の施設でも絵を描いていたため、アート工房班に所属して活動を続けた。そこで描かれたのがこの一連の絵だ。画用紙を受け取ると自発的に描き始めたという。
秦野には発話がなく、はじめは何を描いているのか誰もわからなかった。2001 年に施設内の展示で初めて秦野の絵が飾られた際、彼の兄が「コレは私たちが昔住んでいた家にそっくりだ [1]」と言ったことで、思い出の景色だと判明した。
農家だった彼の実家には、農耕具や養蚕道具のほか、兄が購入した蓄音器やテレビなど、当時の最新機器が揃っていたという。本人亡き今、確証を得ることは難しいが、不思議な道具たちも、想像の産物ではなく家の中にあったモノを描いていたのだろう。
穏やかだが、几帳面でこだわりの強さも持ち合わせていた。直線を引く際は空き箱の一辺に鉛筆を添えて引いた。1 枚の絵が完成するまでに半日ほどかかるが、気に入らないと破り捨てることもあったという。晩年は入退院を繰り返すようになり制作の数は減ったものの、調子がいい時はベッドの上でも絵を描いていた。作品自体への執着は薄く、完成したものは看護師に渡してしまったそうだ。
繰り返し描き思い出を反芻することが、作品として残すことよりもずっと大切な行為だったのだろう。

---

[1] はたよしこ「ギャラリー　秦野良夫」『さぽーと』583 号　3p　日本知的障害者福祉協会　2005 年

第１会場



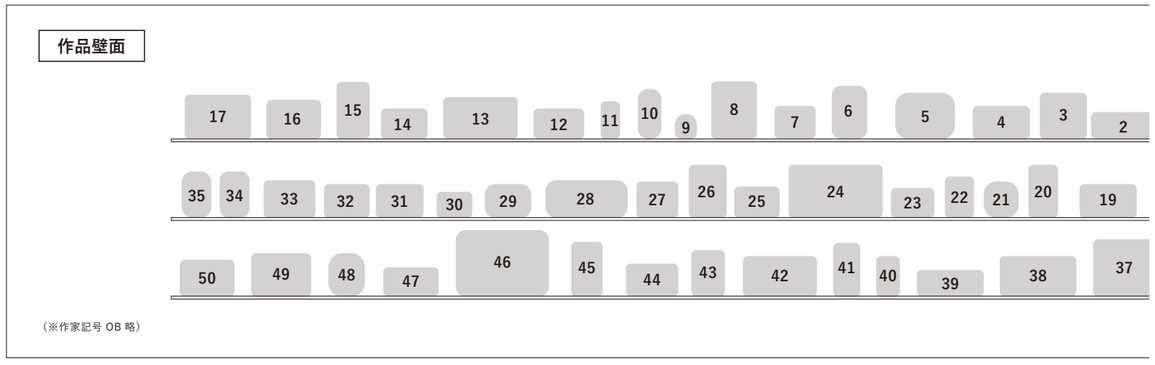


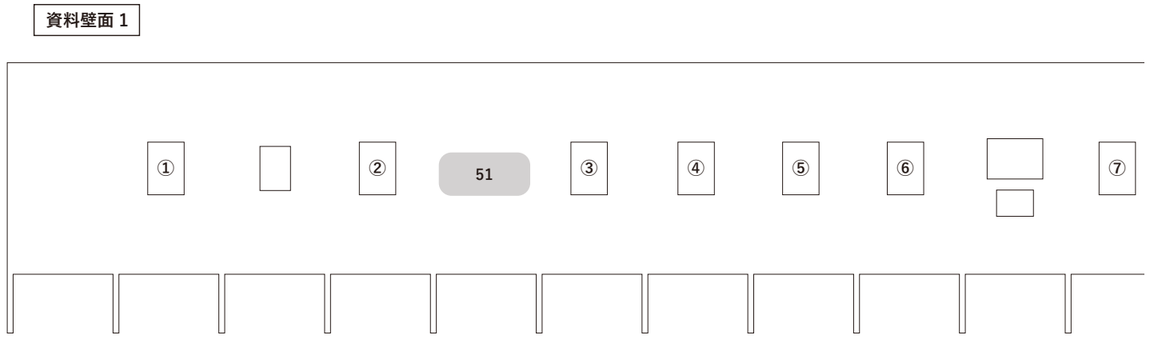
作品壁面

OB-01 《 **無題（魚類）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-02 《 **無題（四角ふたつ）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-03 《 **無題（女）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-04 《 **無題（バーベル？）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-05 《 **無題（建物）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-06 《 **無題（男）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-07 《 **無題（家族）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-08 《 **無題（男）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-09 《 **無題（顔）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-10 《 **無題（だるま）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-11 《 **無題（男）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-12 《 **無題（海の生き物）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-13 《 **無題（軍艦）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-14 《 **無題（植物）**》制作年不明｜鉛筆、段ボール
OB-15 《 **無題（男）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-16 《 **結婚式** 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-17 《 **無題（家族）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-18 《 **結婚式** 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-19 《 **無題（動物の親子）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-20 《 **男** 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-21 《 **無題（男）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-22 《 **結婚式** 》制作年不明｜鉛筆、段ボール
OB-23 《 **結婚** 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-24 《 **無題（ピアノのある家）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-25 《 **茶わん 角ざら** 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-26 《 **無題（男）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-27 《 **結婚式** 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-28 《 **家族** 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-29 《 **結婚式** 》制作年不明｜鉛筆、段ボール
OB-30 《 **時計** 》制作年不明｜鉛筆、段ボール
OB-31 《 **結婚式** 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-32 《 **無題（魚）**》**裏面**｜制作年不明｜色鉛筆、ボール紙
OB-33 《 **無題（植物）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-34 《 **無題（女）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-35 《 **無題（男）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-36 《 **結婚式** 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-37 《 **無題（男女）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-38 《 **ミサイル** 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-39 《 **ラケット** 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-40 《 **無題（女）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-41 《 **無題（男）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-42 《 **無題（船）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-43 《 **無題（女）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-44 《 **結婚式** 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-45 《 **無題（男）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-46 《 **東京タワー** 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-47 《 **無題（魚とライフル銃）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-48 《 **無題（男）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-49 《 **無題（男女）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール
OB-50 《 **無題（男女）**》制作年不明｜色鉛筆、段ボール

資料壁面

OB-51 《 **浜口ツヤ子のお墓** 》制作年不明｜色鉛筆、段ボール





小幡正雄

OBATA Masao

1943 年生まれ、2010 年没。兵庫県。

1943 年 11 月 11 日に生まれた小幡正雄は、66 歳でこの世を去った。
中学 1 年生の時、両親の離婚を期に母と共に瀬戸内海の小さな島へ移り住み、物静かで消極的だった転校生は、のちに赤い服を全身に纏い、赤鉛筆で赤い絵を描く日々をおくった。そして、それらの絵は国内外の展覧会で注目を浴びることになった。抗えない苦労を重ねたであろう彼の人生は、40 代半ばにひふみ園へ入所したところから風向きが変わっていった。厨房から野菜のシミがついた生臭いダンボールを拾ってきては自室に溜め込み、そのダンボールに絵を描き始めたのだ。描き始めたであろう頃から 3 年がたった時、美術家・東山嘉事氏に絵を見初められ、それまで焼却処分されていた絵は作品として保管されるようになった。その 3 年後には、当時兵庫県立近代美術館学芸員だった服部正氏に取り上げられ「アート・ナウ 98：ほとばしる表現力－アウトサイダー・アートの一断面」にて作品が紹介された。そしてその後、瞬く間に日本を代表するアウトサイダー / アール・ブリュットの作家として国内外の展覧会で作品が紹介されることとなった。
2010 年 66 歳の没後、彼の物語はそこで終わらなかった。1000 点以上もの遺作が行き場をなくし残され、それらを調査、整理し所有者を確定させるプロジェクトが始まったからである。身寄りのない彼の作品の身寄りを探すそのプロジェクトの調査記録は服部正氏により「小幡正雄の遺作について」（『国立新美術館研究紀要』第 5 号、2018 年）と題しまとめられた。